

＜吉屋 敬 著書一覧＞

ここでは現在までに発行された自著の紹介を、あつかましくも自画自賛でご紹介します。

① 「櫛の木の下で＝オランダで想うこと」 未来社刊（1990年）

1985年から4年間KLMの機内誌「ウィンドミル」に連載されたエッセイをまとめ出版したもの。

1984年に引っ越したオランダの中心部、レーウヴェイク村にはそれまで住んでいた都市部とは違った原住民！が住み、違った自然、違った生活があった。家人と猫とカモを友に、3本の樹齢100年の西洋トネリコの大木、農家時代の置き土産であるリンゴや梨の古木のある裏庭がある家で始まった新しい生活。オランダに来てその時点でもう二十年も経っているのに、まるで未知の国オランダと出会ったような新鮮な気分を味わう毎日だった。その新鮮さが、今読み返してみると自分でも懐かしい！最後の一章「アム・ソーリー」は、まだ若かった私がオランダに来て間もないころ、戦争を知らない世代だった私がある老夫人と出会って日蘭に戦争があったことを知り、驚き、深く考えるようになる。この章は、出版後間もなく教科書出版社の「中学国語三年」に十二年以上掲載され、後に同社の「高校国語総合」に掲載されて現在にいたっている。若い世代に戦争を考えてもらえる契機になれたことは、私には何よりも嬉しいことだ。各ページに沢山の挿絵を入れて、さらに楽しく読めるよう工夫した。

② 「母の秘蔵の絵」 未来社刊（1992年）

最初の本とは違ってもっとファンタジーや意外性のあるストーリー風の読み物に仕立てた。

我が家を取り巻く湖が凍り、スケートをしていた私は氷の穴の中に転落！これは収録されている＜異星人の肖像＞で描いたものだが、私は氷の下で16世紀の世界に迷い込んでしまったのだ。そしてどうなったのだろうか？（ここで全部書くわけにはいかないで、あとはぜひご自身でお読みください。）

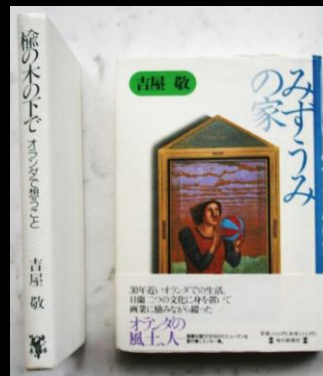
＜母の秘蔵の絵＞の章は、この本の表題となった章。当時90歳に近かった母との交流と思いを綴ったもので、母へ捧げるためにこの章を表題に選んだ。私の母は「おしん」と同じ1904年生まれで、明治、大正、昭和、平成と日本の激動時代を生き抜きながら、その楽天主義、剽軽さ、ユーモアは誰にも真似できない生来のものだった。彼女のように生きたいと思ってもなかなかできない母の生き方は、私にとって今も人生の指針なのだ。とにかく明治時生まれはおもしろい！これも楽しい挿絵がいっぱいの本！



③ 「みずうみの家」 毎日新聞社 (1994年)

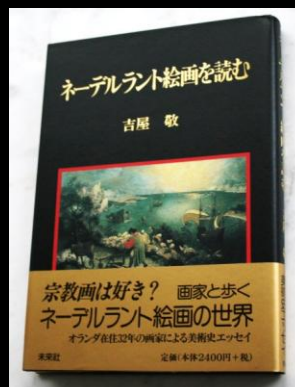
毎日新聞に1993年に1年間にわたって連載したエッセイをまとめたもの。

酔っ払い、居眠り運転で真夜中に帰宅途中、運河に車ごと転落して九死に一生を得て、警察の取調べ室に連行され、罰金刑を受けた実の出来事。お陰でオランダのことをいろいろと勉強させてもらった。そのほか私が経験した日常のオランダ生活をさりげなく書いた楽しく気楽に読めるエッセイ集。オランダ人とオランダ文化、そして田舎の村での生活が充満しているので、読後は一端のオランダ通になれるかも。これも楽しい挿し絵つきの本。



④ 「ネーデルラント絵画を読む」 未来社 (1997年)

初めて書いたオランダ美術の本。14, 5 世紀にはオランダとベルギー、フランスの一部を総称してネーデルラントと呼ばれていたが、この地方に生まれ、独自の発展を遂げたネーデルラント絵画の歴史と意義を、画家の目で、しかし易しく書いてみた。絵画史に不朽の名を残したヤン・ファン・エイク、ロヒール・ファン・デル・ウェイデン、ヒエロニムス・ボス、ピーター・ブリューゲルなどからフェルメールまで、幅広いネーデルラント画家を取り上げて、当時のオランダの社会背景、風土を通してオランダ美術の発生の根拠、現代オランダまで続くその精神構造などを、分かりやすくおもしろく読み説いた読み物風の本。今まで知らなかったオランダ絵画の根源が見えて来るはず……。



⑤ 「青空の憂鬱＝ゴッホの全足跡を辿る旅」 評論社 (2005年)

小学校4年生の時に通っていた絵画教室で初めて見たゴッホの画集。それが私の人生を変えたのだが、そのゴッホに憧れて画家になり、ゴッホの歩いた石畳を歩き、彼の吸ったオランダの空気を吸いたくて20歳の時にオランダにやってきました。しかし、オランダ生活が30年を超えたころになってやっとその初志を思い出した私は、ゴッホの全足跡、つまり彼の短い生涯を辿る旅をスタートする。途切れ途切れの旅は10年間続き、オランダに住んでいて知りえた知識とゴッホの作品と手紙をじっくり鑑賞した結果を総動員して描き出したゴッホの等身大の人間像。旅を続けては書きながらの執筆と取材で、10年をかけた私の文字通りの力作と位置付けている。これを読んだ読者には、ゴッホが身近に、そしてきっともっと愛おしく思えると思う。現地で撮影したごく最近の写真がふんだんに使用されているうえ、滞在した場所の住所一覧表が付記されているので、これ一冊持ってゴッホの足跡を歩くことも可能だ。



もう書店では売っていない本もありますが、インターネットサイトの古書販売とか、普通の古書店、図書館などで探してみてください。読後のご感想もお待ちしています。

なお、暫く前までNTT Data-Getronics社のウェブサイト「SPAZIO＝スパツィオ」に、＜オランダ人への旅＞という題でオランダ人アーティストを中心としたインタビュー記事を掲載していました。バックナンバー5編がデジタル化されていますので、ぜひご一読ください。

<http://www.nttdata-getronics.co.jp/today/spazio/spazio67/>

将来本にまとまった時にはこのサイトでお知らせしたいと思います。

2012年10月 <吉屋 敬>